河岸段丘：雪国の礎

十日町市は河岸段丘と呼ばれる、平坦な土地に階段状に張り巡らされた地質構造の上に位置している。信濃川流域には9つの段丘があり、それぞれの斜面には濃い緑色の森林の帯が広がるのに対し、平地には市松模様のような水田が規則正しく並んでいる。このような地形が、平らな土地に住居を建てやすく、作物を育てやすい、人間の暮らしに適した雪国を作ったのだ。

十日町の河岸段丘は、地殻変動によって押し上げられた土地が、川によって浸食されて形成されたものだ。十日町の段丘が形成され始めたのは、約40万年前、近くの苗場山の噴火の後である。信濃川とその支流が噴火地域を流れ、火山灰や石を浸食し、山麓に沖積平野を形成した。しかし、この地域は大きな断層に沿って位置しており、2つの地殻プレートが周期的に押し合う動きによって、土地が崩れ、段丘面の標高が高くなった。川は常に低地を流れようとし、流れを変え、時間をかけて新しい川床を浸食した。このプロセスが数千年の間に何度も繰り返されることによって、今日の段丘が形成された。

1万年以上前に人類が初めてこの地域にやってきたとき、段丘はここに住むことができる平地を提供した。紀元前300年頃に農業が始まったとき、火山灰をベースとした土壌は、川の水や雪解け水によって山から運ばれてきたミネラルによって豊かになり、非常に肥沃であることが証明された。十日町の雪深い冬は厳しいものであったが、この豊かな地形は人類が生き延び、繁栄するための強固な土台となった。